

## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

### 《東北支社 松山部長》

2月10日、本社で人事部との打ち合わせを終えた松山部長は、帰路につく新幹線の中から、すっかり暗くなった外の景色に眼をやり、思わずため息をついていた。 5

精密機器メーカーの東北支社で営業部長を勤める松山部長が、同期で本社の人事課長でもある高橋氏に呼び止められたのは、1年前の1月のことであった。その日もいつも通り全国営業所長会議に出席するために本社を訪れた松山氏は、会議終了後に人事部に顔を出すように言われていた。会議終了後、高橋課長のもとへ赴き、お互い一通りの近況報告をし終わると、高橋課長はおもむろに松山部長に問いかけた。 10

「ところで、君は香山君のこと覚えてるかい？ 実は今度、香山君を君の所に配属しようかという話になっているんだ。というか、君しかお願いできる人がいないんだよ。君も知っているとおり、香山君は3年ほど前、1年間休職したんだ。復職後、本社の営業部でかれこれ2年間働いてもらっているんだが、もうそろそろ第1線に戻してもいいのではないか、という声が営業部から出ているんだ。確かにこのまま本社に配属しつづけるのは、香山君にとっても良いことではないと思うんだ。彼の年齢だと、普通はもう課長になっていてもおかしくないのだが、1年休職したことで、少しばかり昇進が遅れているんだ。だけど、本社に置いたまま課長にするわけにはいかない。どこかの支社で課長代理として実績を積んで、その後課長に昇進するという段取りを踏まないと、周囲も納得しないしね。香山君は有能な営業マンだ。会社としても彼をなんとかしたいんだよ。君なら一度一緒に働いたこともあるし、うまくやってくれるんじゃないかなと考えたんだ。」 20

松山部長は急な話に驚いたが、高橋課長の話が一段落したので、ようやく口を開くことができた。

「香山君は、確か精神的な病気で休んでいたんだろう？ 一体なんの病気だったんだい？ 本当にもう大丈夫なのかい？」 25

松山部長の問い合わせに対して、高橋課長は次のように答えた。

「彼が医者からもらってきた診断書によれば、『躁うつ病』という病気らしい。気分が落ち込んで会社に来れなくなる時期が続いたかと思えば、急に元気になってハイになったりするらしい。休職時には、1ヶ月以上会社に来れなくなつたそうなんだ。でも医者ももう大丈夫だと言つてい

---

本ケースは慶應義塾大学大学院経営管理研究科の渡辺直登教授の指導の下、博士課程の坂爪洋美が作成した。尚、ケース上の個人名に関する若干の事実は偽装されている。